

令和5年

春

木曾三川 歴史・文化の調査研究資料

KISSO

2023  
Vol.  
126

# 坂祝町

変幻極まわりのない  
流れの美しさを誇る  
名勝木曾川

地域の歴史

古代瓦と農村舞台から見る産業と文化

地域の治水・利水

名勝木曾川の治水とまちづくり

特別寄稿

特別寄稿

船頭平閘門百二十周年を記念して

研究資料

長島一揆と海部地域

弥富市歴史民俗資料館 学芸員 大坪恵里佳

8

5

3

1

# 古代瓦と農村舞台から見る産業と文化



坂祝町役場に造られた「美濃耐寒いぶし瓦」のモニュメント〈提供：坂祝町役場〉

岐阜県の中南部に位置する坂祝町は、面積が十二・八七平方キロメートルの小さな町です。しかしながら、町内には数々の遺跡や遺物、古墳、文化施設などが残されており、この地域に古くから集落が形成されていたことが分かっています。

それらを通じて、町の歴史、人々の暮らしや想いを垣間見ることができですが、中でもこの地域独特の古代瓦と農村舞台を紹介します。

## 1. 古より息づく瓦の系譜

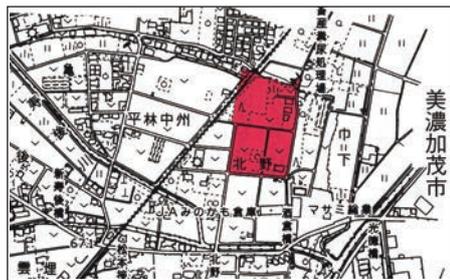
(一) 古代瓦が出土した雲埋廃寺跡

坂祝町内では古い瓦がいくつか出土しています。その一つが坂祝町酒倉にある雲埋廃寺跡です。雲埋廃寺跡は木曾川へ流れ込む加茂川の河岸段丘上にあり、大正期まで林に囲まれた建物もしくは寺院跡が残存していたことが地籍図から想像され、古代の寺跡であることが濃厚な場所です。雲埋廃寺は地名に由来して別名「北野廃寺」とも呼ばれていたと言われています。

大正末期、雲埋廃寺跡から開墾中に発見されたのは単弁八葉文軒丸瓦という瓦で、直径が推定十五センチメートル、厚さが一・五センチメートルほどの大きさです。これは奈良県高市郡明日香村にある日本最初の尼寺と言われる豊浦寺遺跡から出土した瓦に酷似しており、さらに岐阜県可児郡高岡町にある願興寺廃寺から出土された軒丸瓦に周縁を除けばよく似ているとも言われています。

雲埋廃寺跡から古代瓦片が出土することは、以前から美濃加茂市の郷土史家である林魁一氏によって報告されていましたが、詳細な調査を実施する前に、遺跡は区画整理によって消滅してしまいました。ただし、現在確認されている三種類の古代瓦のうち、表面採取（地表に現われている遺物などを採集すること）によって、第一形式と第二形式が出土しています。

(第三形式は見出土) また、雲埋廃寺跡からは、瓦と



雲埋廃寺跡の位置（坂祝町酒倉）〈提供：坂祝町役場〉

ともに奈良時代頃の須恵器や土師器も出土しました。さらに礎石と呼ばれる建物の柱を据えるために使われた石（幅一〜二メートル大）もいくつかが確認されています。



雲埋廃寺跡から出土した第二形式瓦〈提供：坂祝町役場〉

なお、坂祝町周辺で出土する古代瓦は、滋賀県の湖東地域からもたらされた湖東式軒瓦に分類され、百済・新羅の系譜をひくものともされており、美濃地域では特異な例となっているようです。

## (二) 地場産業へと発展した瓦製造

七世紀後半に美濃加茂市に存在した古代寺院薬師寺で使用されていた瓦が、坂祝町深菅地区輪形で焼かれたものであることが分かっています。瓦が焼かれたとされる窯は「輪形古窯」と呼ばれ、主に飛鳥時代の頃の瓦を焼いていたと推測されています。こうして生産された瓦は、美濃国だけでなく尾張国にも供給されており、瓦の交流には木曾川の水運が利用されていたようです。また、これらを裏付けるかのように坂祝町の北西にある勝山、深菅、黒岩地区からは瓦づくりに適した粘土が豊富に採れました。採取した粘土を野積みにし、二、三年をかけて風雨にさらして微生物などを自然分解させ、原料となる土を多種類混合することで質の良い粘土を作り出していたとされます。

坂祝町では、輪形古窯址の他に明治以前の瓦づくりの記録が残されていませんが、明治の中頃から町内の数件で瓦製造が始まったことは定かです。黒岩地区の株式会社兼松製瓦工業が明



坂祝町公民館の「美濃耐寒いぶし瓦」モニュメント

治十六（一八八三）年の創業で、坂祝村誌には深萱地区の藪下平三郎、黒岩地区の梅田兵助等によって明治中期に着手されたと記されています。

坂祝町で製造されている瓦は、「美濃耐寒いぶし瓦」と呼ばれるもので、耐火度の強い土を高熱で長時間焼成するため、耐寒性に優れ、吸水性も低く、強固な瓦であることが特徴です。良質な粘土に恵まれたことに加え、戦後に瓦製造技術の研究が進んだことで坂祝町の瓦の耐寒性は評判になり、県内はもろろん全国に販路を拡大し、地場産業としての地位を確立していきましました。

坂祝町の瓦は町内の一般住宅はもちろん、公共施設や寺社などのほか、恐山、山形城、駿府城、小田原城、上田城など全国各地の神社・仏閣に使用されています。ところが昭和後半の住宅建築様式の変化に加え、瓦以外の屋根素材や三州瓦等の普及もあって次第に需要が減り、瓦職人も少なくなりましたことで平成に入ってから急速に不振となり、かつてのような地場産業の姿は見られなくなりました。

しかし、現在も美濃耐寒いぶし瓦製造を

に続ける企業は町内に存在し、坂祝町の瓦製造の歴史を垣間見ることができます。

## 二、地芝居の熱を物語る 深萱農村舞台

岐阜県は全国的にも地芝居が盛んな地域として知られ、全国有数の「地芝居大国」と言われています。地芝居とは、地元の人々が演じる芝居の総称で、歌舞伎、文楽、能狂言、獅子芝居があります。江戸時代、農民たちが最初に会った演劇は、能の合間に演じられる「狂言」でした。以来、農民たちはさまざまな演劇を楽しむようになり、元禄期以降は「芝居」という言葉の流行とともに、自らが演じるようになっていきました。

江戸時代から明治時代にかけて、当時の深萱村（現在の坂祝町深萱）でも、村人たちが盛んに農村歌舞伎を演じたり見たりして楽しんで伝えられています。

その深萱にある十二社神社の鳥居をくぐり、石段を登ると現れる深萱農村舞台は、芝居熱がいかに高かったかを物語っている場所です。深萱農村舞台は、村の木工棟梁であった丹羽文吉（八五四～一九九三）によって建てられたと伝えられています。十二社神社の拝殿として本殿と向かい合うように建ち、拜殿と芝居小屋が一体となっている非常に珍しいものです。建築様式は棧瓦葺き、切妻、妻入り、正面と西側面に



十二社神社の入り口。奥に深萱農村舞台が見える。

庇をつけ、正面破風には手すりのついた高窓が設置されて、庇の上部に木彫り彩色の鶴の飾りものが据え付けられています。

これらのことから、深萱農村舞台は典型的な拜殿であると考えられます。客席を屋内に持たない半小屋式となっていて、舞台前の広場や神殿の石段は観覧席、舞台機構は回り舞台、セリ、太夫座、花道の取り付け口があり、奈落も備えられています。回り舞台は舞台中央にあり、直径五・二メートル、中心に心棒のある皿回し形式です。奈落は回り舞台を棒で押して回したり、楽屋として使ったりするスペースとして使用されていました。

また深萱農村舞台には、嘉永七（一八五四）年の引幕や芝居関係文書約二十点も保存されており、当時の農村における芸能活動を知る上で貴重な建物と言えます。昭和四十七（一九七二）年七月には、岐阜県の文化財指定を受けています。

深萱農村舞台では、昭和三十三（一九五八）



正面から見た深萱農村舞台〈提供：坂祝町役場〉

年に地元の青年団員によって歌舞伎が演じられたのを最後にしばらく上演はされていませんでしたが、平成二六（二〇一四）年、五十六年ぶりに歌舞伎公演が行われました。



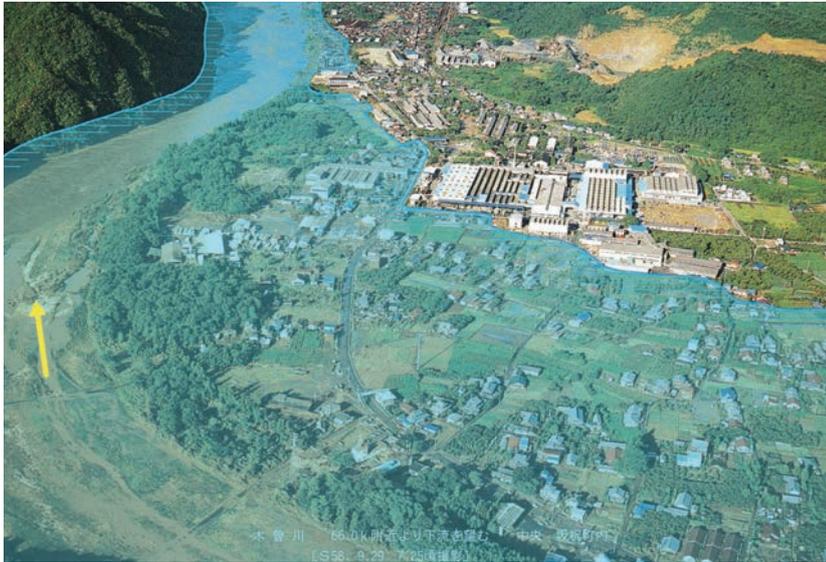
深萱十二社神社祭りの様子〈提供：坂祝町役場〉

現在では、毎年四月の第一土曜日・日曜日に「深萱十二社神社祭り」が開催されており、小学生男子十二人による「子踊り」と、女子四人による「浦安の舞」といった伝統の踊りが奉納されています。深萱農村舞台は、いわば坂祝町の芸能文化の象徴と言えるでしょう。

### 参考文献

- 『坂祝町史 通史編』 坂祝町 二〇〇五年
- 「坂祝町の文化財と古墳マップ」 坂祝町教育委員会
- 「さかほぎふるさと探訪」 坂祝町郷土史研究会 一九八六年
- 「坂祝町観光ガイドブック」 坂祝町 二〇二二年
- 「美濃地方における湖東式軒瓦の展開」 大塚章 一九九六年
- 「特に、各務原・加茂地区を中心として」
- 『「ミノ」「カモ」の古代』 御野戸籍から一三〇〇年― 美濃加茂ミュージアム 二〇〇二年

# 名勝木曾川の治水とまちづくり



9. 28豪雨災害時おける坂祝町内の浸水範囲

坂祝町域の木曾川は、「史蹟名勝天然記念物保存法」により国指定の文化財に指定され、「名勝木曾川」として保護されていますが、古代から現代まで木曾川を起因とする水害が幾度も発生しており、災害への備えも必須です。

九・二八豪雨災害から四十年目を迎える中、治水対策を着実に進めるとともに、景観の保護や川を活かした新たなまちづくりが期待されています。

## 1. 木曾川による水害とその対策

木曾川の沿岸に位置する坂祝町は、古代より木曾川の洪水被害を何度も受けてきたと思われ、現存する記録にはほとんど見ることができません。

『坂祝町史 通史編』では、取組村の「留書之覚」と岐阜県内の災害記録を掲載した『岐阜県災異誌』から、最古の記録は貞享四（一六八七）年六月の水出往還上迄附としており、そこには「同年十月に取組村において激流のため民家二十三戸流失、耕地の流亡多し。」と記載されているようです。また、それ以後の被害状況について、表1の通り、とりまとめています。

十六世紀頃からは、木曾川河口域で輪中が造られてきましたが、本格的な治水事業として伝えられているのは、文禄二（一五九三）年から始められた「文禄の治水」です。これは、天正十四（一五八六）年に発生した木曾川大洪水による尾張国の荒廃を救うため、豊臣秀吉が手がけたものです。その後、江戸時代に入ると、徳川家康の命により木曾川左岸の犬山市から弥富市に至る「御田堤」が築堤されました。

しかし、木曾川右岸は大々的な築堤工事が実施されず、常襲的な洪水は氾濫に見舞われてい

表1 坂祝町周辺の被害状況  
〈出典：『坂祝町史 通史編』〉

年号	西暦	被害状況
元禄十四	一七〇一	取組村家屋流出二十三戸
元禄十五	一七〇二	取組村辺池入水
享保一	一七一六	取組村激流溢して家屋浸水
享保二	一七二七	取組村沿河の地を浸す、上流に山崩れあり水来
明和二	一七六五	取組村入水家三十五軒流れる畑三反流れる
安永八	一七七九	木曾川大洪水美濃尾張一円大水
天明六	一七八六	加茂郡沿河の地水平より一丈五尺高
寛政十	一七九八	加茂郡沿河の地流出家屋多し
文化十二	一八一五	加茂郡沿河の地被害あり
天保十二	一八四一	取組村で激流中山道へ暴漲す
天保十三	一七四二	取組村中山道筋へ暴水漲溢し家二戸流失
慶應一	一八六五	酒倉村、取組村、勝山村家屋数戸流失

ました。そうした中で、宝暦四（一七五四）年に薩摩藩による御手伝普請によって逆川洗堰等が行われ、これが木曾三川分流工事の始まりとなり、明治二十（一八八七）年にオランダから技師ヨハネス・テ・レイケを迎えて三川を完全に分離する改修工事が実施されました。



坂祝町民グランドに積まれたゴミの山（当時）

その後も堤防の改築、掘削、浚渫等の改修工事が進められ、さらに昭和十三（一九三八）年七月の洪水を機に、加茂郡八百津町に丸山ダムの建設が決定され、太平洋戦争を挟んで昭和三十（一九五五）年に完成しました。

それから二十年以上が経過した昭和五十八（一九八三年）九月、台風十号と秋雨前線の影響による大雨で、美濃加茂市と坂祝町では軒下まで達するほどの浸水が発生しました。美濃加茂市では総世帯数の約十五％、坂祝町では総世帯数の約十二％の家屋が甚大な被害を被ったという記録が残っています。

浸水面積は両市町あわせて約二九〇ヘクタール、死者一名、被害総額はおよそ二八億円という未曾有の災害となりました。この災害を受け、丸山ダムの治水・利水機能向上のために新丸山ダムの



# 船頭平閘門百二十周年を記念して



パレード通航、閘門へと進む船を眺める来場者の皆さん

令和四（二〇二二）年は、船頭平閘門が完成した明治三十五（一九〇二）年から百二十年の記念すべき年です。そこで川と人々との関わりについて活動をしているNPO法人木曾川文化研究会が主催、愛西市観光協会と中部地方整備局木曾川下流河川事務所が共催、河川財団名古屋事務所が後援し、「船頭平閘門百二十周年祭」として「特別記念講演会」と「閘門フェスティバル」が開催されました。

九月二十五日に愛西市中央図書館で行われた「特別記念講演会」では、閘門の設計と建設工事に携わった主任技術者・青木良三郎（以下、青木技師）の功績と閘門の新たな知見について紹介されました。

## 特別記念講演会の実施 テーマは「船頭平閘門建設の 不思議と謎」

大同大学名誉教授で、NPO法人木曾川文化研究会の久保田稔理事長による特別記念講演会「船頭平閘門建設の不思議と謎」は、船頭平閘門の「三つの謎」、「フィート単位での設計」、「煉瓦層の使用」、「古レールの使用」についての「謎解き」でした。

まず一つ目の謎、「設計になぜフィート単位が使われたのか？」に迫られました。

木曾三川の明治改修時、船頭平閘門を設計した主任技術者・青木良三郎技師は「フィート」を自在に使用できました。しかし、現場の職人さんには「尺」や「間」の感覚がしっくり体にしみ込んでおり、職人さんが図面上のフィート単位で構造物を造ったとは考え難く、「フィート（三〇・四八センチ）と一尺（三〇・三センチ）は数値が近いこともあり、フィートを尺に読み替えて造ったのではないが、また、明治改修計画図での川幅や流量の単位が、お雇い外国人技術者・テ・レイケ技師の設計検査を受けるため、フィート単位であったことを思い起こせば、フィート単位で描かれた閘門設計図を「非公式に検討した外国人がいたのではないか」と理事長は推理されています。

次の謎は、「煉瓦層の使用」です。明治初期は、セメントに煉瓦層を混入すると強くなると考えられており、船頭平閘門建設の材料や施工方法を記述した『閘門工』には、煉瓦層を全セメント量の五パーセント混入したと記されています。しかし、閘頭部の花崗岩の隙間を充填したモルタルの分析結果からは、煉瓦層が検出されていません。煉瓦層は、おそらく閘頭部基礎（前後二ヶ所の扉室の最下部）のコンクリート工内に混入されたと理事長は推理されています。

三つ目は、「古レールの使用」についてです。『閘門工』には、「閘頭部基礎のコンクリート工

内に古レール七〇〇尺（二〇メートル）を埋設」と記されています。

まず、煉瓦層を混入させて強度を増したコンクリート工内に、さらに古レールを埋設したにも関わらず、コンクリートの強度不足の心配を払拭できなかったのか、設計変更として、「長さ約七〜八メートルの鋼桁を各閘頭部のコンクリート工上部に十一本ずつ設置」したものと理事長は推理されています。

この鋼桁の理設は、船頭平閘門が日本で最初の鉄筋コンクリート製である可能性を秘めています。なお、コンクリート工内に配置されたはずの古レールは設計図に示されておらず、この古レールは明治改修工事に使用した軽便軌道用と考えられています。



特別記念講演会の講師、久保田稔理事長

青木技師の恩師・田邊朝郎は、明治三十六（一九〇三）年に琵琶湖疎水運河に古レールを用いたメラン式アーチ橋を架橋しましたが、現在はこの橋が日本初の鉄筋コンクリート製の橋と言われています。しかし、青木はその一年も前に、船頭平閘門を古レールや鋼桁を用いたコンクリートで建設しており、「今後、鉄筋コンクリート製の船頭平閘門は多くの人々の注目を集めるだろう」と、理事長は力を込めて話しました。

会場では、聴講者が双眼鏡でスクリーンの図表を見たり、ノートにメモを取ったりするなど、熱のこもった講演会でした。

## 晴天のもと開催された 閘門フェスティバル

「閘門フェスティバル」は、愛西市の船頭平

開門周辺で、式典とイベントが行われました。開催日の十月十日は、「晴れの特異日」と言われています。未明に激しく降っていた雨も、朝になるにつれて雨脚が弱まり、九時頃には雨もやんで青空も見えだしました。準備を進めていたNPO法人木曾川文化研究会の会員たちは、「さすが特異日だ!」と歓喜し、晴天に恵まれた一日が始まりました。

九時半からイベント参加者の受付が始まると同時に、続々と開門通過体験の申し込みがあり、乗船の予約券を獲得した人が増えていきました。

## 開門百二十年を祝う式典

午前10時、開門フェスティバル第一部の式典が始まりました。

愛西市観光協会に加藤憲治会長が開会挨拶、NPO法人木曾川文化研究会の大宮理事が開式の辞を述べた後、来賓者の愛西市の日永貴章市長、木曾川下流河川事務所の大坪祐紀所長、明治政府に船頭平開門の設置を粘り強く請願した佐藤義一郎の子孫であるサンジルス醸造株式会社の佐藤信義会長から、百二十年を祝う挨拶がありました。佐藤家には四・五・六代目当主に揃って臨席いただきました。

その後、NPO法人木曾川文化研究会の久保田理事長が「開門百二十年のあゆみ」と題して、オンライン技術者の来日から船頭平開門完成までの経緯について解説しました。さらに、愛西市の高校一年生の土方匡紀さんが、「開門百二十年によせて」と題した意見発表表を行



次第に晴れ間が広がる空の下、式典を開催

い、「未来の人のために我が身を挺して建設工事に従事した先人たちの最大の敬意と感謝を心に刻み、この思いを次の世代につないでいきたい」と力強く宣言しました。若い世代の熱い宣言に、列席者は心を打たれた様子でした。

最後に、NPO法人木曾川文化研究会の宮沢理事の閉式の辞で、式典を締めくくりました。

日差しが強さを増す中、公園内では紙芝居や開門検定クイズなどが開始され、静粛な式典から一転、子どもたちの賑やかな声があふれました。

## 「水のエレベーター」を体感したパレード通航

式典が終わると来賓客らは乗船場へと移動し、フレジャーボート、モーターボート(作業船)、手漕ぎで進むコム製のEボートなど四艘に乗船すると、長良川と木曾川を往復するパレード通航へ出航です。

長良川を進んだ船が門扉前で停止すると、現地の操作員が長良川と開門内(開室)を結ぶバルブを操作して開門内外の水位を同じにします。すると一枚が重さ約十トンもある扉四枚が開き、船は順序良く開室へ入って行きました。これほど重厚な扉ですが、平成六(一九九四)年までは屈強な男性四人が各自一枚ずつ手回しで開閉していたとか。もちろん今は電動です。バルブ操作によって開室内の水位が木曾川と



左から、愛西市の日永貴章市長、木曾川下流河川事務所の大坪祐紀所長、サンジルス醸造株式会社の佐藤信義会長

同じになると、「水のエレベーター」を体感した来賓客らに乗せた船は木曾川へ。水位調整に要する時間は、木曾川の干満により異なります。大潮の干潮時には水位差が二メートル以上に及び、なんと三十分以上を費やすそうです。

開門上を横切る橋の上では、来場者たちが「初めて見た!」「早く乗りたい」と珍しそうに眺めており、船が開門を通過する際には、船上の人と手を振り合っていました。

## 多くのファミリーが楽しんだ乗船体験

午後からは、多くの来場者が長良川と開門を往復する乗船体験を楽しみました。パレード通航には間に合わなかった愛西市観光協会の観光船も加わり、四種類五艘から好みの船に乗れました。

乗り心地はどうだったのでしょうか。手漕ぎのEボートに乗船した館さん一家は、「手漕ぎボートだけと思ったより揺れなかった」「川の上は風が気持ちよかった」と笑顔がこぼれていました。小学生のお子様からは、「筋肉痛になりました。」「の声も。また、長良川と木曾川の水位の違いが改めて分かった」と話し、「開門を通ると川の特徴が分かりやすい」「こんなに川の高さに差があったなんて」と驚いた様子でした。

フレジャーボートに乗船した水澤さん一家は、「門扉が開いたり、内部の水位を調整したりする光景を見たのは初めて」「早く走って爽快!」「船の上から眺める

千本松原や長良川大橋の景色が、ふだんとは違う良さがあって」と楽しそうでした。さらに「今度は花見



開門の上から眺める人たちに、手を振る乗船者の方々

の季節に来て観光船に乗ってみたい」と次回への意気込みも語ってくれました。

## 子どもたちの歓声が響いたお楽しみ行事

また、公園内のテ・レイク広場では、子どもたちが気軽に参加できる「開門検定」「折り紙教室」「折り紙ヒコーキ飛ばし大会」「紙芝居」などが行われました。

紙芝居では、NPO会員が情感たっぷり語りかけます。子どもたちは前のめりで聞き入り、時に自分の意見や発見をお口にしながら、物語の世界にひたっていました。

折り紙ヒコーキ飛ばし大会は、子どもたちが折り紙で紙ヒコーキを作るところからスタートです。中には、普段から「紙ヒコーキの本を見て、自分で改良して折っている」という強者の小学生も。みんな試行錯誤して、一生懸命に折っていました。大会は一人ずつ順番に飛ばし、より遠くに着地させた人が勝者で、当初は子どもたちを見守っていた保護者の方たちも次第に興味をひかれ、大会終盤に次々と参戦し、合計三十名ほどが挑戦しました。愛西市観光協会からはマスケットキャラクター「あいさいさん」の人形、サンジルス醸造株式会社からは即席味噌汁など商品の提供があり、賞品・記念品として贈られました。子どもたちは入賞メダルに喜び、保護者の方々は即席味噌汁に「助かるわ」と笑顔になり、親子みんなに楽しい大会になったのでした。

この日、乗船体験は約百六十名が楽しみ、船はほぼ満席状態でした。ファミリーを中心に二〇〇名ほどの来場者で賑わったイベントは、和やかな雰囲気のまま幕を閉じました。



遠くまで飛ばよう工夫を重ねた、紙ヒコーキづくり

## 船頭平閘門設置と桑名の発展に貢献した 佐藤義一郎に思いを馳せる

明治三十五（一九〇二）年に完成した木曾川と長良川を結ぶ船頭平閘門は、「桑名の佐藤義一郎らが国会に請願」して造られたと多くの書物などに記されています。義一郎は、桑名の廻船問屋「港屋」の経営や銀行の創立などに携わり、明治二十六（一八九三）年には「木曾揖斐両川問閘門設立請願書」を持参して上京した実業家でした。

今回、その一族の子孫にあたる桑名市のサンジルス醸造株式会社の佐藤強社長と、NPO法人木曾川文化研究会の久保田稔理事長が、義一郎の功績や船頭平閘門と桑名の関わりなどについて語り合いました。



サンジルス醸造株式会社 佐藤強社長

### 地域のために尽力した義一郎

久保田：佐藤義一郎は、桑名城址にある戊辰戦争忠魂碑の建立義捐者として名が刻まれ、銀行や三重県初の病院を設立するなど市内随所に功績が残っています。大きなことを成し遂げたご先祖について、佐藤家ではどう伝承されているのでしょうか。

佐藤：父の母にあたる祖母から功績は伝え聞いていますが、人物像など詳しいことはわかりません。私の家には祖母がまとめた佐藤家にまつわる本があり、それによると義一郎は本家の長男ではないため、家長を継ぐ意思はなく、幼少だった甥っ子が成長するまで後見人として支える考えだったようです。

義一郎は湊屋の経営に携わっていましたが、時代を見据えて廻船問屋から撤退しました。そして、木曾三川の豊富で良質な水を生かし、



前跡地（天守台跡）の石碑（天守台跡）の石碑

「記念碑建設招魂碑（天守台跡）の石碑」に協力したと推測しているのですが、米穀商や桑名財界の人々も請願運動に協力したと推測しているのですが、佐藤：事業取引の記録はあるものの、請願については何も残っていません。当初は請願といっても名義上だけかと推測していましたが、先生の話聞いて義一郎自ら行動したことを知りました。久保田：義一郎がいなければ、閘門建設は進展しなかったでしょうね。佐藤：公共事業に尽力した一方、

そこには私財を投入し、自身の財産は染かなくなりました。しかし、人とのつながりは今も受け継がれていることがあります。桑名銀行設立時の出資者十人ほどの子孫が、毎年集まる日があって、春日神社（桑名宗社）を一緒に参拝しているんですよ。

### 桑名の人も閘門に親しんでほしい

佐藤：ところで船頭平閘門は、国の視点からはどのような位置付けなんでしょうか。日本初の鉄筋コンクリート造ですよね？

久保田：はい。国内で三番目に造られた近代閘門で、重要文化財に指定されています。鉄骨が埋設されていることを確認したいと、私は以前から調査に関係者に提案しています。資料にあるように、閘頭部の基礎コンクリート工内に強度を増すため煉瓦くすの混入と古レールの埋設を行い、さらにコンクリート工の上部には、鋼桁を前後の閘頭部に各十一本ずつ埋設したことを明らかにしたいのです。

これを確認すれば、「日本で最初の鉄筋コンクリート製の閘門」と認められ、大きな注目を浴びると思っています。

船頭平閘門広場で昨年十月に開催されたフェスティバルには、社長をはじめ三代にわたる佐藤家の方に臨席いただきました。それまでもこの閘門と関わる機会はありませんか。

佐藤：数年前、桑名市の教育委員会委員を引き受けるにあたり、地域の文化や歴史を見直す中で閘門に辿り着きました。また、プライベートでは息子が夏休みの課題で取り上げ、一緒に出かけたことがあります。ただ、私がつとものは小学校の遠足で船頭平閘門に行く機会もありましたが、今はそうしたこともなく、桑名の人々が閘門の存在をどれくらい知っているのか疑問です。

先日フェスティバルでは、愛知県各地の小中学生が見学に訪れ、親しんでいる様子聞き、桑名の人々はあまり関わっていないことをより一層感じました。もっと閘門を身近に感じて欲しいですね。

久保田：まさにおっしゃる通りです。船頭平閘門の所在地は愛知県愛西市ですが、設置する原動力は桑名にあったのですから、桑名の人達に、地元の人々が物資運搬や治水に役立つ閘門建設に尽力したことを知って欲しいですね。



明治九年に融通会所が勧請した春日神社境内の「皇大神宮分霊社」なお右奥は桑名東照宮

閘門に愛着を持ってもらうために、当NPO法人は、桑名市の歴史案内人や愛西市の観光ボランティア、さらに海津のふる里おもてなし隊と連携した活動の必要性を感じています。そうした活動を通じて、閘門見学を各学校や地域の教育委員会に呼びかけたいと考えています。今日対談して、さらに一層、義一郎を閘門設置に突き動かした情熱の源を詳しく知りたいと思いはじめました。

本日は貴重なお時間をいただき有難うございました。

### 佐藤義一郎の略歴

早世した兄東太郎に替わり（※注、桑名の廻船問屋「港屋」の経営や桑名藩の御内用係、現代の銀行のような組織）に携わり、藩の財政支援に大いに寄与。戊辰戦争で幕府方についた藩主の救済運動にも奔走した。明治四（一八七二）年の廃藩置県後、義一郎は家長の地位を兄の息子孫右衛門に譲り、自身は分家したが、明治十一（一八七八）年の桑名城址の旧濠貯木場化に関する内務省との交渉に梶島、水谷と共に甥も同伴して上京するなど、事業の術や見識を高める教育を甥に施した。また、三重県下で最初の病院となる桑名病院の創設をはじめ、桑名銀行や桑名紡績所（後の三重・東洋紡績）の創立などに携わった。由緒ある桑名米取引では、米商會時代の明治十（一八七七）～二十（一八九三）年は重役、米穀取引所時代の三十一（一八九八）～三十五（一九〇二）年は理事長を務めた。

（※注）KISSO119号で、義一郎の父孫大夫の没年天保十一（一八四〇）年を東太郎の没年と誤って記しました。ここにお詫びし、訂正いたします。

# 長島一揆と海部地域

弥富市歴史民俗資料館 学芸員 大坪 恵里佳



願証寺の跡地。明治時代の木曾三川分流工事で水没した（現三重県桑名市長島町）

全国統一の歩を進める織田信長に対して、浄土真宗本願寺派の本山であった石山本願寺は十年にわたって戦いを続けました。この時各地の勢力が本願寺側として戦いましたが、長島（現三重県桑名市）を拠点とした長島（一向）一揆は特に激しい戦いを繰り広げました。

長島一揆は中世から近世へと移り変わる時期の東海地域を考える上で欠かせないテーマですが、近年研究が進み、これまでに通説とされていたことは異なる一面が明らかになってきています。

本稿では、まずこれまでの研究の成果をもとに長島一揆や信長との戦いの動向を概説します。その上で、長島の西隣に位置する海部地域の人々は、信長と一揆との戦いが起きた時にどのような行動をとったのかについても紹介します。

## 1. 長島一揆の背景

十三世紀に親鸞が浄土真宗を開いて以降、門徒は全国各地に拡散して真宗を伝えました。真宗の東海地域への普及は他の地域より比較的遅く、関東など複数のルートから次第に流入し定着したことが分かっています。東海地方で真宗が急速に発展したきっかけは、「真宗中興の祖」といわれる運如の六男である運淳が、十五世紀末に長島の願証寺の住持となったことでした。このことを機に、願証寺は東海地域での真宗の布教の重要な拠点になりました。

長島周辺は伊勢・尾張・美濃の三国の境界に位置し、木曾三川の複雑な流れの中に島々が浮かぶような地形をしていて、「河内」と呼ばれていました。浄土真宗教団の大きな拠点は全国的に低湿地に非常に多いのですが、その理由として教団が高い治水技術を持っていたため、稲作に不利な条件を持つ地域の人々に支持された可能性が指摘されています。

長島もそのような低湿地に生まれた有力な拠点の一つでした。

河内は願証寺を中心に真宗の拠点となり、戦国時代になっても有力な武家勢力に支配されていない、いわば



長島周辺の古絵図〈引用：『長島町誌上巻』〉

権力の空白地帯でした。一方で、勝幡や清州など織田氏の拠点にも近く、十六世紀前半の記録からは織田氏同士の争いに本願寺系寺院の興善寺（愛知県弥富市荷之上町、現住所は名古屋市中区）が介入している様子が見て取れます。



興善寺地藏（愛知県弥富市）  
天正年間までこの地にあった興善寺の跡地から発見されたと伝わる



富岡神社に残る伝小木江城跡（愛知県愛西市）

また、周辺地域の在地領主などにもたびたび侵攻されていて、武家勢力と宗教勢力との不安定な関係がうかがえます。

武家権力がなぜ河内を完全な支配下におけなかったかについては、当時は有力な寺社や港町、国境地域などが世俗を離れた不可侵領地的な場所と認識されていたからと考えられています。世俗の世界で追われた人々は、一旦そこに入ると世俗とのつながりが絶たれる一方で、その地域の共同体にのみ安全が保障されます。しかし、権力者側からするとその地域には世俗の論理が通用しないため犯罪者や謀反人などの引き渡しや叶わず、支配が及びませんでした。このことは稲葉山城の戦いで信長に敗れ、美濃から退却した斎藤龍興が長島に逃げ込んで追撃を逃れたことからもうかがえます。

また、河内の周辺地域では古代以来桑名や津

島、菅津といった湊が作られ、各地をつなぐ水運が古くから整備されてきました。そのため、この地域の人々は単なる農民ではなく、浸水しやすい土地で農業をしながらも河川や海を舟で行き来し、漁業や流通業に携わりながら生活していたと考えられています。後述するように、河内は伊勢湾沿岸の遠方の港町とも結びつきがありました。

## 二、信長との戦い

尾張を統一し全国統一を意図した信長でしたが、足利義昭を奉じて入京した後、本拠地に近いにも関わらず河内を支配下に置くことはできませんでした。

元龜元年（一五七〇）に、本願寺の法主であった顯如が全国の門徒に信長打倒の檄を飛ばしたことで、十年にわたる石山合戦が始まりました。この時に長島周辺の一揆は本願寺に呼応して拳兵し、小木江城（現愛知県愛西市森川町）に織田側の拠点を築いていた織田彦七（実弟の信興と考えられている）を攻め自害させました。このことをきっかけに、信長は三度にわたって長島を攻撃しました。

元龜元年（一五七一）の第一次攻撃では、信長は津島に本陣を置き、津島方面、「中筋口」、「太田口」の三方から長島周辺を攻撃しました。信長軍はある程度攻撃した後には退却しましたが、退却の時に一揆側に反撃されて柴田勝家が負傷、氏家卜全が戦死しました。

天正元年（一五七三）の第二次攻撃では北伊勢に進軍したため、桑名の多くの在地領主が信長に挨拶に訪れています。従来はこの時に信長が桑名を大規模に攻撃したとされてきました。しかし、近年ではこの時点ですでに桑名の大部分の領主が信長に従っており、第二次攻撃では信長に従わなかった領主のみが攻撃されたことが明らかになっています。第二次侵攻でも信長軍は退却の時に一揆側に襲撃され、林通政らが戦死しました。

なお、第二次攻撃の時に信長は次男である北畠信雄を通して伊勢の大湊の住民に対して河内への攻撃を命じましたが、大湊側は理由をつけて協力しませんでした。大湊が信長に従わなかった理由は、この時点で伊勢湾沿岸地域の港町を結び交通・流通のネットワークがあり、大湊は港同士の間接関係を守ることが重視したからであると考えられています。

最後の攻撃である天正二年（一五七四）の第三次攻撃はそれまでのものとは性質が明らかに



長島城跡（三重県桑名市長島町）  
現在は小学校と中学校の敷地となっている。

異なるもので、信長軍は陸上・水上から長島を大規模に攻撃しました。このとき伊勢湾岸のいくつもの港町から水軍が出船していることから、先ほど述べた伊勢湾岸の港町土のネットワークは、この時点で信長の支配下に置かれたと考えられます。信長軍は長島城・大鳥居城・屋長島城など一揆側の籠城していた拠点を三か月にわたり包囲しました。一揆側は多数の餓死者を出し最終的に降伏しましたが、信長は降伏を受け入れるふりをして退却時に攻撃し、最後には一揆側の城を焼き討ちしました。

信長の最後の攻撃は当時の史料の中で「根切」と表現され、「信長公記」によると数万人を殺害するという苛烈な結果により幕を閉じました。信長側もこの時に一揆側の捨て身の反撃にあい、一族や重臣が数多く討死しています。

## 三、海部地域と一揆

長島の東隣に位置する海部地域は、中世には海西郡と海東郡に分かれていました。両郡の土地の大部分は尾張国とされていたものの、海西郡の西部は河内の一部も構成していました。海部地域には在地領主であり信長に対抗した服部氏らがいた一方で、信長を輩出した勝幡系織田氏の本拠地である勝幡城なども位置しています。

長島一揆に関する資料の中で、海部地域に関する同時代に作成されたものは少なく、ほとんどが後世に作られたものや伝承類となっています。そのため十分な面はありませんが、河内の近隣でありながら国境の尾張側の地域として、海部地域の人々の長島一揆への対応はどのようなものであったのか、地域内の記録を集めて考察しました。

まず、海部地域の人々が一揆と信長との戦いにどのように対応したのか、地域的な傾向を考察しました。すると、同じ海西郡・海東郡内でも記録の内容や分布に大きな差があることが分かりました。具体的には、海西郡の特に河内に隣接した地域には記録自体が多く、一揆側に味方したという内容のものが多く残っています。しかし、河内から離れた地域や海東郡では記録が少なく、また信長側に味方したという記録や信長に好意的な記録の割合が多くなっています。

また、戦いに関わった人々の信仰については、真宗の寺院や門徒が一揆側に加勢したという記録が多いものの、真宗以外の立場であるものの一揆側として参戦したという記録もありました。また、真宗ではないのに信長側に攻撃されたり、一揆側の攻撃時に焼失したりした寺の記録も複数ありました。一度信長側として参戦したものの、後に一揆側に寝返ったという二面性をもつ記録すらあります。

なお、第一次攻撃の際に、真宗とは無関係であるはずの多度大社（現三重県桑名市多度町）に信長に焼き討ちされたという記録が残っています。同様に、海部地域でも宗教以外の理由からどこらかに加勢し、敵対する側に攻撃された寺や人々が多くあったことが推測されます。

#### 四、海部地域の特質

これまでの研究で、本願寺勢力の重要拠点の一つである北陸と比較して、東海地域の一揆はあまり門徒が組織的に編成されず、強い結集が作られなかったことが指摘されています。

海部地域でも同様に、住民が地域一丸となり

長島一揆に参戦したという記録はほとんど見当たりませんでした。また、両者側の資料を検討しても、願証寺に関連する記録はほぼありませんでした。願証寺は戦後の再興時に清洲に移転した影響で記録が少なくなっている可能性があります。ありますが、それを考慮しても特筆すべき少なさとなっています。

なお、東海地域では本願寺系の寺院は本願寺の直接の末寺となることを目指し、本願寺の一族が住持となった地元の一家衆寺院の末寺になることを望まない傾向があったのではないかと指摘されています。海部地域でも同様に、地域の寺は一家衆寺院である願証寺の意向に必ずしも従わず、そのため戦いに対してさまざまな対応がとられたため願証寺関係の記録も少なくなっただのではないかと推測されます。

また、信長との戦いより以前に北伊勢の地域的な結集はすでに解体していて、河内周辺の地域は広範囲で一丸となって信長と対抗できるような状況ではなかったことが明らかになっています。その理由としては、河内は伊勢・尾張の国境に位置するため、伊勢の人々に自分たちとは異なる地域であるという意識が働いていた可能性が指摘されています。実際、河内は当時の史料で伊勢国とされていたり、尾張国とされていたりします。

海部地域は、中世から近世を通して大部分が尾張国と認識されています。海部地域の人々や寺が長島一揆に対して一体性のない対応をとった理由も、多くの人が伊勢の人と同様に、河内が自分たちの所属する地域ではないと認識していたからかもしれません。

海部地域は尾張・伊勢・美濃という三国の国境地域であり、また織田氏という武家権力側の



西照寺（愛知県愛西市）  
前身である遍照院は真言宗であったが、信長に攻撃され焼失したと伝わる。



「見越の信長松」の一部  
信長が樹勢を褒めたことが名前の由来となったと伝わる松。現在は枯死して幹の一部が残る。  
〈提供：愛西市教育委員会〉

重要拠点と、河内という真宗の重要拠点がどちらも近くに存在するという独特の状況にあります。また、一家衆寺院である願証寺の地域の寺院に対する影響力は、他の地域ほど強くありませんでした。その結果、両者に戦いが起きた

場合は片方への加勢や静観、宗派を超えた加勢など、個人や寺の単位でさまざまな対応がとられていました。

#### 参考文献

- 『濃尾平野に於ける本願寺教団の発展と一向一揆―上―』『日本歴史』一六一号 金子昭武 一九六一年
- 『濃尾平野に於ける本願寺教団の発展と一向一揆―下―』『日本歴史』一六二号 金子昭武 一九六一年
- 『戦国の争乱』岩波講座日本歴史中世4 鈴木良一他 一九六三年
- 『織田政権の成長と長島一揆』『中世真宗思想の研究』重松明久 一九七三年
- 『長島町誌 上巻』伊藤重信 一九七四年
- 『織田信長と長島一揆』日本国家の史的特質 稲本紀昭 一九九五年
- 『東海三域の一向宗と長島一揆』『一向一揆論』金龍静 二〇〇四年
- 『戦国期伊勢・尾張国境地域の歴史的展開』『年報中世史研究』第三八号 播磨良紀 二〇一〇年
- 『東海地域における真宗勢力の展開』『年報中世史研究』第三八号 安藤弥 二〇一三年
- 『「長島一向一揆」再考』『織豊期研究』第十六号 石神教親 二〇一四年
- 『海西郡・海東郡からみた長島一揆―伝承あるいは口碑に注目して―』『ふびと』第七三号 嶋野恵里佳 二〇二二年

姫ヶ淵 (坂祝町勝山)

今から四百年以上前、猿啄城の殿様は多治見修理という名の武將で、この辺りをおさめていました。ちょうどその頃、織田信長は天下取りの第一歩として猿啄城を攻め落とす計画を立て、丹羽長秀を総大将に、河尻与兵衛ら数千人の軍勢を差し向けて来ました。

ところが、猿啄城は険しい崖の上に立っており、また多治見軍の激しさに、織田軍はなかなか攻め入ることができませんでした。その様子を見た河尻与兵衛は手下を連れ、密かに城山の裏手から攻めかかりました。不意をつかれた多治見の殿様は、家来を連れて山つたいに城を逃れました。

一方、城に残った家来たちは勇ましく戦うものの、次々と討ち死にしていきます。それを見た殿様の長女春姫は、「私も武將の娘、逃げるわけには行かぬ。」と長刀を振りかざし、斬り込んでいきました。幼い頃から武術を学び、男を凌ぐほどの腕前の春姫、勢いに乗った多治見軍は、織田軍を少しづつ押し返しました。しかし、織田軍は「この女、なかなか手強いぞ。油断するな。」と春姫を囲み、そのうちに木曾川の崖ぶちまで追い詰められてしまいました。

「それっ、捕らえよ!」捕らえられてなるものか」というが

早い、春姫は木曾川の淵をめぐって身を翻し、自ら命を絶つたそうです。以来この淵は「姫ヶ淵」と呼ばれ、また、春姫が飛び込んだ岩は血で赤く染まり、消えることがなかったと伝えられています。



猿啄城跡 (正面山頂)と木曾川

出典:『さかほぎのむかし話』

昭和五十七年 坂祝町教育委員会

表紙写真 『名勝木曾川』 (提供: 坂祝町役場)

「名勝木曾川」の指定範囲は、可児市・坂祝町・各務原市・犬山市の3市1町にまたがり、激流から激流又激流から清流へと変化する流れの面白さ、山峡の美奇石怪の絶景はドイツのライン川にも劣らぬ景観と絶賛され、「日本ライン」と名付けられました。

船ちゃんのこぼれ話 第十七話

「船頭平閘門 (木曾川文庫) の住所は? その5」

今回は、閘門の場所の地名「十六石山」についてのお話です。木曾三川下流域では、昔から中州や寄洲 (堤防に引付くように出来た洲) を「〇〇山」というように呼んでいました。特に、ヨシ原のようになった洲に付けられていたようで、十六石山もそんな場所の一つだったようです。



図1 十万山 (地理院地図Vectorを加工して作成)



図2 閘門周辺の宝暦12(1762)年の様子 (「古図 宝暦12年(十四山村史)」にて作成)

江戸時代に、この「山」を利用した新田開発が盛んに行われ、現在の地名にも名残が見られます(「源六山」→「源六山新田」→「源六輪中」→「現: 木曾岬町源六輪中」等)。

この開発により、新しい山が出来たり消えたりし、地形は変化していったのですが、江戸から現在まで「山」として存在し続ける場所に「十万山」があります。現在の長良川河口堰のすぐ下流です(図1)。

この場所は、桑名藩(11万石)と長島藩(約1万石)の間に位置したため、石高の引き算で、「十万山」と名が付いたと言われています。

今回、「十六石」の由来はわかりませんが、江戸時代この地は、大森村(図2の①)の飛地のような場所で、この村には百石山(図2の②)という山もあったようですので、その山との関係なのかもしれません。

また、図2の③の「鶉(ウズラ)山」は、尾張藩初代のお殿様がいらした際に、鶉が沢山いたことからその名が付いたと言われています。それからすると、十六石山は蛇の多い地だったとの事なので、ひょっとすると蛇のついた地名になっていたかもしれません。

『KISSO』 Vol. 126 令和5年3月発行

編集 木曾三川歴史文化資料編集検討会 (桑名市、木曾岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか)

発行 国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465

TEL (0594) 24-5711 ホームページ URL <https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/>

編集後記

KISSOは、創刊号からの全てが木曾川下流河川事務所のホームページよりダウンロードできます。